

報告別講評

A. 研究部門・報告Ⅰ

寺内 一

読解中のノートテイキングが一貫した 心的表象に与える影響

— 再話による読解情報の復元を通して —

【研究者：小野 由香子】

現在の英語教育では、テキストの文法解析ではなく、行間の情報も含めた豊かな読解に基づく思考、判断、表現が求められている。本研究は、再話に役立つノートテイキングの種類を明らかにし、熟達度を考慮した上でそれを効果的に指導するための方法を提案している点で教育的な意義がある。

本研究で取り上げた3種類のノートテイキングは学習者が日常的に行っているものであるため、本研究から得られた示唆は教育現場ですぐに取り入れることができるようになっていることが大きな特長である。統計を活用した量的な分析では、ノートテイキングの種類による再話の差を確認することができなかったが、ノートの質的な分析により、再話の成績が向上するノートテイキングの特徴を明らかにしている。ノートテイキングの種類に差が出なかったことから、特定の方略使用を促すという結論ではなく、学習者が自分やテキストにあった種類を選択し、その上で再話の成績を向上させるためのノートテイキングを指導するという結論につながることも、集団授業による画一的な指導ではなく、個に応じた指導が求められる現在の教育に適合している。

今後、本研究を発展させるためには、実際に実施したノートテイキングの指導が、熟達度を含む個人の特性にどのような影響を受けるのかを明らかにすることが必要であろう。どの(What)種類をどのような(How)方法で、誰に(Who)教えることが効果的なかがわかれば、教師は目の前にいる学習者に合わせて指導に役立てることができるようになる。

A. 研究部門・報告Ⅱ

和泉 伸一

グラフィックオーガナイザーを用いた 心的表象構築プロセスの視覚化と評価

【研究者：工藤 大奈】

英文読解をする際に、一つの助けとなるものとして、グラフィックオーガナイザーがある。グラフィックオーガナイザーとは、英語のテキスト情報を図式化して、文章の論理構成や流れを視覚的に提示するものである。工藤氏の研究では、(1)英検で用いられるリーディング問題でグラフィックオーガナイザーがどこまで使用が可能かということと、(2)リーディングをしながらグラフィックオーガナイザーを作成した場合、それがどこまで読み手の読解プロセスと理解を助けることができるかについて調べている。

調査結果は、(1)英検準2級・2級・準1級のとりわけメール文と説明文の内容一致選択問題でグラフィックオーガナイザーが活用可能ではないかと結論づけている。(2)に関しては、設問正答率とグラフィックオーガナイザーの作成との間には、特に強い関係性は見出せなかった。

本研究はそのデザインや分析方法など、今後改善が必要と思われる部分も少なくないが、グラフィックオーガナイザーの役割に注目し、それがどこまで使用可能で、どれほど読解過程で役立つものかを調べた視点は重要である。英語授業での読解の支援策として、語彙指導や構文解説、あるいは日本語訳を与えたりすることばかりに終始してしまうことがある。しかし、グラフィックオーガナイザーのような視覚情報を与えたり、作成させたりすることも、学習者主体の一つの有益な支援方法となり得るだろう。それがどういったテキストに対して有効で、どのような効果があるかについては、今後も研究を続けていくことが重要だろう。グラフィックオーガナイザーの示し方や作成手順も含めて、更なる研究が進むことを期待する。

A. 研究部門・報告Ⅲ

西垣 知佳子

英字幕付き音声動画の視聴による
第二言語の偶発的語彙学習

— 使用する音声動画マテリアルに関わる変数を持つ影響 —

【研究者：黒川 皐月】

本研究の目的は、英語あるいは日本語の字幕付きの英語の動画の視聴が、偶発的語彙習得に与える影響を調査することであった。参加者は、CEFRのB1からB2の、2,000語から3,000語レベルの語彙知識を持つ大学生と大学院生148名であった。動画はTED-Edから選定され、動画の語彙レベルと参加者の語彙レベルが綿密に統制された。参加者は動画を2回視聴し、日本語字幕と英語字幕の有無の組み合わせにより4群が設定された。さらに2群が追加され、画像のみから得られる内容理解、意図的な語彙学習の効果が検証された。効果検証には、意味理解の深さが異なる3種類のターゲット語の語彙テストが、指導前と指導終了の約1週間後に実施された。

収集されたデータに対して、一般化線形混合モデルのロジスティック回帰分析を行った結果、英語の動画を学習教材にする際は、動画に対する学習者の語彙カバー率に注意する必要があることが示唆された。具体的には、動画は映像・音声・音響が伴うため、カバー率が90%で十分な内容理解がなされ（読解では95%）、95%になると未知語に注意を向ける余裕が生まれ、日本語、英語の字幕が無くても、偶発的な語彙習得が起こった。本研究の結果を踏まえると、動画によって発音、場面・状況を伴った語彙習得が引き出されることから、カバー率95%以上の動画を使った偶発的な語彙習得を加えることで、教室での教科書による意図的な語彙学習を補完できると言う貴重な教育的示唆が得られた。

以上から本研究は、動画を語彙学習教材として利用する際の教材選定に有効な指標を示した点で、動画の活用、また、偶発的な語彙習得に関する貴重な基礎的研究と言える。この領域の研究は日本では多くない。今後も発展的に研究を継続していただくことを願っている。

A. 研究部門・報告Ⅳ

小泉 利恵

複数テキスト読解でのつながり形成が
日本人EFL学習者の統合的理解に
与える影響の検証

【研究者：三上 洋介】

複数のテキストを読み進めて情報を得ることは、日本語ではよくあり、英語でも増えつつある。またテストにも、複数テキスト読解が取り入れられつつあり、例えば、令和7年度大学入学共通テストの英語（リーディング）試作問題や、令和5年度全国学力・学習状況調査の調査問題の小学校・中学校（国語）で確認できる。三上氏は、そのように現実先行的に広がっている複数テキスト読解の中で、テキスト間のつながりを、大学生がどのように形成し、統合的に理解しているかを検証した。テキスト間の関係も、内容の方向性が同じ「相補的テキスト」と異なる「対立的テキスト」を読んだ場合の相違など、母語で行われた先行研究を日本の英語教育の場面で応用するための基礎研究として実りある報告を行っている。

また論文では、読者にとって手順が分かり、再現性研究ができるように丁寧な記述がされている。例えば資料1や2を見ることで、採点基準やプロセスの理解が深まるだろう。透明性の高い記述は、研究者としての誠実さを示すものであり、また該当分野への興味と、一般化と文脈化に向けた研究と実践への関心を高める重要なステップである。

本テーマは英語教員だけでなく、テストや教材作成の団体も関心があるテーマであろう。関係者の関心を拾い上げ、相補的・対立的テキストにとどまらない複雑なテキストの読解や、その過程で鍛えられる批判的思考力の特徴など、多方面への研究・実践として発展していくことを期待する。

B. 実践部門・報告Ⅰ

西垣 知佳子

高専生による説明文理解を深める 協同的な再話活動

— 状況モデル構築につながる質問項目の比較・検討 —

【研究者：伊東 賢】

本研究は、昨今、英語の授業改善の方策の1つとして注目される「再話」に関する研究である。再話には、学習者の英語レベル、教材の種類と難易度、支援の有無とその種類、再話の際の使用言語（英語・日本語）等、複雑な要因が関与する。本研究では、CEFRのA1～A2レベルの国立高等専門学校2年生が、英語の説明文を学び、再話に5回取り組んだ。参加者140名を、英語による再話の有無、再話が止まった時の再話再開の足場がけ質問の有無という条件の違いで3群に分け、発話の流暢性の向上、また、文面どおりの内容理解と推論を伴う内容理解（状況モデルレベルの理解）の効果を検証した。

その結果、英語を使った再話では、発話の流暢性は、発話スピードよりも発話量の増加、ポーズの長さの短縮に効果があった。また、推論を伴う内容理解よりも、文面どおりの内容理解のほうに効果があり、学習者はテキストの英語表現に注意を向けていたことが推測された。なお、今回は、聞き手から再話者への足場がけ質問が単語レベルであったため、2つのレベルの内容理解に効果が見られなかった。初級学習者が、英語の再話で内容理解を深めるには、足場がけ質問の出し方を練習する必要があることも推測された。

本研究を通して、英語による再話が引き出す効果が示された。また、初級学習者の英語の再話では、どのような認知処理を経て内容理解が進むのか、あるいは停滞するのか、その学習過程の可能性が示され、どのような活動を行うと、どのような効果を期待できるのか、また、どのような練習が効果をあげるのかに関する基礎データを得られたことは意義深い。伊東氏は継続して再話研究に取り組んでおられることから、今後の研究の進展に多いに期待する。

B. 実践部門・報告Ⅱ

小泉 利恵

日本人高校生に対する、短期間でより 効果的なスピーキング活動： 「タスクの繰り返し」の検証

【研究者：上野 正和】

現在の学習指導要領に基づき、高校では様々なスピーキング活動が行われている。その中で上野氏は、週3回2週間、集中的に絵描写タスクの繰り返しを行い、その流暢さへの効果を検証した。その結果、流暢さの中で伸びる要素を示し、また方法ではインターリーブ型を継続する形がより効果であることを導いている。また絵描写の繰り返しの間には、模範解答の提示や振り返り活動を行い、毎回のペアを変えるなどの教育的支援も取り入れ、生徒が話すことへの自信を高めたことが報告されている。

研究として要因の特定のためには、要因を絞り、それ以外の要因は入らないような工夫が通常必要とされる。しかし、通常の英語授業の中で行う研究では、それが厳密に行えなかったり、また行うべきではなかったりする。今回は教育的支援を重視した形で行い、意義ある研究になった。しかし研究結果の解釈としては、タスクの繰り返しとその後の支援を含めた効果と理解するべきだろう。また上野氏は、本研究の手順や資料を詳細にまとめているため、非常に参考になる。さらに言えば、著作権を踏まえつつ、使用した絵や資料のファイルなどを、できるだけ多く補助資料として公開することを望む（公開例：<https://osf.io/bjtg6/>）。

今後はこの研究を土台として、5～10分程度の帯活動でタスクの繰り返しを取り入れた場合の効果や、絵描写後に生徒同士のやり取りを入れた場合の効果などの実践や研究が広がっていくことを祈る。

B. 実践部門・報告Ⅲ

寺内 一

未知語推測トレーニングの効果： 品詞への注目を促す明示的指導を 通して

【研究代表者：岡田 龍平】

現実の言語使用場面において、未知語の推測は頻繁に行われる処理であるため、推測能力を育成する指導の効果を明らかにすることは、実践的な言語使用につながる点で大いに価値がある。

特に、未知語の推測能力の指導方法はいまだ確立されていない中で、著者は形式重視のトレーニングと意味重視のトレーニングを実施している。これらは教師が日々の指導に組み込むことが容易であるため、どちらがより効果的かを明らかにする本研究は教育的な意義が大きい。統計的な分析では、トレーニング方法の違いによる指導効果の差は明らかにならなかったが、トレーニングの前後で品詞を同定する能力の向上が見られている。このことから、筆者が取り上げた2つのトレーニングは一定の教育効果があることが証明された。

なお、推測の手がかりを同定する能力と未知語の意味を推測する能力について、本研究ではトレーニングの効果が確認できなかった。著者はこの理由として、指導時間や練習回数を挙げている。もちろん、トレーニングの量を増やせば効果が上がることは期待できる。ただし、未知語の推測プロセスは非常に複雑であり、未知語の種類や推測に生かせる背景知識や文脈も様々に異なるため、実際にはどれか1つの指導が効果的というよりは、複数の指導法を組み合わせることが最も効果的であることが推察される。したがって、今後の研究として、学習者のレベルや英語学習の目的等に合わせて、どのような指導法の組み合わせや指導順序が効果的なのかを明らかにする研究も必要となってくるであろう。

B. 実践部門・報告Ⅳ

竹内 理

中学校の「読むこと」における Mediation活動を通した 思考・判断・表現力の育成

【研究者：林 さなえ】

本実践は、英語の「読むこと」において、Mediation活動を通して、中学生の思考力・判断力・表現力を高めることを意図している。具体的には、中学3年生20名が、ペアワークの形態で、別のペアとは違う内容の物語文・説明文を読み、その内容を相手に伝える活動を行った。この中で、聞き手には話を聞きながら内容に関する質問を行うことを、また話し手には読んだ内容をもとにそれらの質問に答えることが求められた。この実践の結果、生徒たちのリーディング教材の理解度は、テキストのジャンルに関わらず上昇した。また、内容に関する質問や、推論を活用した質問など、生徒が内容理解を深めるために行ったやり取りの過程から、思考力・判断力・表現力を高めるといった目的に関しても、一定の成果が得られたことが確認された。

MediationというCEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)にも位置づけられている概念を具体的な活動として取り扱い、思考力・判断力・表現力という測定の難しい課題に、質と量の両面から果敢に挑んだことは高い評価に値する。今後この実践が、単発ではなく長期にわたり行われ、その成果がどのように言語能力の向上にも役立つかという問題まで踏み込むことが出来れば、中等教育における英語教育に大いに貢献するものと期待できる。

B. 実践部門・報告Ⅴ

齊田 智里

AIツールを活用して日本人中高生の 学習の主体性を高めることをねらった ライティング指導

【研究者：松井 市子】

AI技術の進化をどのように英語教育に活用していくかは、教員にとって大きな関心事であり、実践研究の発展が期待される分野でもある。松井氏の問題意識は、ライティングの指導にAI技術を取り入れることで、生徒はより多くのアウトプットの機会を得ることができ、教師はフィードバックの負担を減らすことができ、結果として学習の主体性を高めることができるのか、という点にある。

本稿は、公立の中等教育学校全6学年の生徒を対象に実践研究を行った報告である。教師の指導は介さず、AIツールによるフィードバックのみを頼りに、中高生は自力でライティング力を向上させることができるのか、またこの実践を通して主体的に学習に取り組む態度が育成されるのか、という研究課題の下、ライティングの支援ツールとして3種類のソフトウェアを生徒に紹介し、生徒自身に最適なものを選ばせ、継続的にタスクに取り組ませた。生徒のライティングにおけるCEFRレベルや自律学習能力スコアなどに、事前と事後・遅延で違いがみられるかを生徒からのアンケート回答をもとに分析し、教員からも意見を聴取した。GIGAスクール構想、AIツール、個別最適な学び、主体性といった現代的な教育テーマを英語ライティングの指導に適用した意欲的な実践研究である。生成AIの登場により、教育分野におけるAI活用に関する議論が一層活発に行われている。今後のこの分野の研究の発展に注目したい。

C. 調査部門・報告Ⅰ

齊田 智里

学習者の英語観と情意要因

— グローバル英語に焦点を当てて —

【研究者：池田 幸恵】

英語使用が拡大する中、英語の概念が母語話者英語から非母語話者の多様な英語変種へと変化してきている。英語の多様性を重視する「グローバル英語」(Global Englishes)という新たな英語概念が浸透する中で、英語学習者の英語観や、動機付け、英語完全主義、スピーキング不安といった情意要因も変化していると考えられる。池田氏は、この点を明らかにするために、高専生を対象に、英語学習観と情意要因との関係を調査した。高専生は、実践的技術者を目指し、アジア圏を中心とする非英語圏の人々との国際交流の機会が多く、英語概念の変化が彼らの英語学習観や情意面にどのような影響を与えているかを調査することは、この研究分野に新たな知見をもたらし、教育的示唆が期待される。

池田氏は、先行研究で使用された英語学習観と情意要因に関する質問紙を改良してデータを収集し、新たに因子分析を行い、相関分析と重回帰分析の結果をもとにパス解析を行い、丹念に変数間の関係解明を試みている。複雑なパス解析による結果の解釈は難しい面もあるが、高専生の英語教育においては、グローバル英語志向と日本人英語話者としてのアイデンティティを育むことが有用であるとの結論に至った点は、グローバル英語の時代の英語教育の方向性を示したものとして意義が大きい。池田氏も指摘するように、高専生の英語観が5年間の教育課程でどのように変化していくのか、英語観の変容に最も影響を与える要因は何か、といった長期的かつ縦断的な研究が今後期待される。